

父親は自分の仕事に誇りを持って

先年、イタリアを旅行した時、靴を一足購入しました。店に入った私は、気に入った靴を見付け片足を入れてみました。靴はよく足に合っていました。それでこれをくれと言いますと、靴屋の主人は、両足に靴をはかせ、そこにしゃがみ込んで、皮の上から私の足全体を何度も何度も丁寧に撫で回しました。そして、「これはだめだ」という大きな身振りをすると、山のように積まれた箱を一つ一つ丹念に調べ始めました。私は今まで、この程度なら十分に満足していたので、「これで結構。これを貰おう」と言いますと、「それは足によく合っていない。もっとよく合うのを見付けるからちょっと待て」と言って捜し続けました。

こうして時間をかけて捜し出した靴をはいてみて、私は驚きました。その靴は私の足全体を實に見事に包んで、靴をはいたような感じがしないのです。歩いてみて重さを感じません。靴屋の主人の満足げな顔を見て、これがほんとうの靴屋というものだ、と私は思いました。

こういう靴屋は、一代限りで出来るものではないと思います。あの靴

屋の主人は、自分の職業に誇りを持ち、生涯をかけて腕を磨いたことについて自信を持っていたのだと思います。それは、親から子、子から孫へと、何代もかけて築き上げられたものだと思います。そしてこれがほんとうの“教育”だと思います。

わが国は、明治維新で、この精神を失ったと思います。自分の職業に誇りを持ち、堂々とそれについて子どもに語る父親が次第に少なくなり、敗戦後はそれが特にひどくなったと思います。だから、今の子どもたちは、父親がどんな仕事をしているか、家族のため、世のためどんな努力をしているか、父親について何も知らないという子が多くなっています。

父親について知っていることと言えば、たとえば、家でごろ寝をしていたり、テレビを寝そべって見ていたりという、頼りない姿だけです。これでは、父親を頼もしく思ったり、尊敬できるわけがありません。

父親は、積極的に自分の仕事について語るべきであり、出来れば、その腕前の良いところを子どもに見せてやるべきだと思います。そうすれば、父親を自然と尊敬するようになるだろうし、また、父親のあと

を継いでその仕事をやってみようという気持ちにもなり、理想的な親子関係が出来上がるだろうと思われま

そうならば、親子の会話は自然と生まれますので、今よく言われている“親子の断絶”ということもなくなってしまうだろう、と思われま

前に紹介しました狂歌の中で、子どもたちは「父厳しくて……それでよいのだ」と言い、「人並に叱られてみたい……」とっております。しかも「叱られるのが好きだ」という人間がいるはずはありません。しかし、中学生ともなると、どういう行為が善くてどういう行為が悪いかは、それまでの生活経験で十分に理解しています。

また、悪いことをすれば、とがめられ、叱られるのが当然であり、子どもとしてもそれを覚悟しています。ところが、この親たちは、とがめるべき子どもの行為を見ていながら知らぬ顔をしています。「叱るべき時にも叱れない父親」「ただ甘いだけで少しも頼りにならない父親」を持ったこの狂歌の作者たちは、ほんとうにかわいそうだと思います。

子どもは、背後に、頼り甲斐のある父親を持っていて、初めて安心して強く生き生きと活動することが出来るのです。だから、見かけだけ

では子どもは甘い親を歓迎しているようですが、心の奥底ではこわくても強い、厳しい父親を求めているのです。

また、そういう厳しい父親に鍛えられて、初めて、社会の荒波を越えて行ける、一人前の人間になれるのです。「かわいい子には旅させよ」という昔の諺も、厳しさだけが人間を鍛え、人間らしい人間を作る、ということを読んでいるのだと思います。ほんとうに子どもがかわいかったら、厳しい父親、叱れる父親になることに努めなければなりません。